

Nature Exposed: Soseki's View of Korea and His Illness at Shuzenji Temple

SHIBATA Shoji

Natsume Soseki (1867–1916) has often been regarded as having had a contemptuous view of non-Japanese East Asian countries such as China and Korea. However, this interpretation is not necessarily correct. Soseki's "individualism," a way of thinking that values others as well as oneself, led him in fact to respect other countries and not just Japan, especially given the common practice in the Meiji period (1868–1912) of connecting the individual directly with his or her nation.

Certainly, Soseki had no strong attachment to China or Korea. Nevertheless, he was critical of Japan's imperialistic expansion, an attitude expressed in *Sorekara* ("And Then," 1909) and *Mon* ("The Gate," 1910), works produced contemporaneously to the Japanese annexation of Korea (in 1910). In *Mon*, the protagonist and his wife are a solitary pair who live frugally in a tiny house under a cliff, without children; to Soseki, they symbolize the future of Japan and express his gloomy outlook for his nation. In Soseki's world, children are a symbol of the future, and so the fact that Oyone, the wife, cannot have a child, experiencing repeated miscarriages, reflects the infertility and sterility of imperial Japan.

After finishing *Mon*, Soseki faced a health crisis, vomiting 800 g of blood at the spa at Shuzenji Temple in 1910. It has often been said that this crisis brought about a turning point in Soseki's writing, because it made him recognize his fear of death. But in reality, his work shows no radical change after this crisis. His interests and themes remain the same. For instance, in *Higan Sugi Made* ("To the Spring Equinox and Beyond"), his first work written after the crisis, we can find several allegorical expressions characteristic of Soseki's work as a whole; to take one example a cane appears with a handle shaped like the head of snake swallowing "something" that is not clearly described. The relation between the snake and the "something" being swallowed corresponds clearly to that between Japan and Korea. Similar allegories can also be found in Soseki's previous work. In this way, the strength of Soseki's artistic vision led him to maintain his method in works following his crisis of health.

でも「満州から朝鮮に渡つて、わが同胞が文明事業の各方面に活躍して大いに優越者となつてゐる状態を目撃して、日本人も甚だ頼母しい人種だとの印象を深く頭の中に刻みつけられた」と述べられている。もつとも『満州日日新聞』は満鉄の子会社であり、その社長の伊藤幸次郎も大文学子備門で漱石と同級であった旧知の人物であり、そうした人間関係が前提となつて書かれていることを差し引かねばならないだろう。

(15) 講演「物の関係と三様の人間」は『満州日日新聞』明治四十二年（一九〇七）九月一五日から一九日まで各一面に掲載されている。なおこの講演の内容は『論座』二〇〇八年九月号に紹介され、明らかになった。

(16) 韓国併合に関する記事は当然新聞紙面を毎日のように賑わせていた。条約調印直後から『東京朝日新聞』には「併合せらるる朝鮮」「朝鮮雑話」といったコラムが連載され、漱石が大吐血を起こした八月二四日には「朝鮮人は日本に同化し得る乎」という思想家・教育家の海老名弾正の談話が掲載されている。また「韓国併合詔書」が発せられた翌日の八月三日の紙面はほとんど併合関係の記事で埋められた。

(17) 江藤淳『漱石とその時代』（第四部、新潮社、一九九六）による。

漱石の文章の引用は基本的に『漱石全集』（岩波書店、一九九三～九九）により、講演「物の関係と三様の人間」は『満州日日新聞』（一九一・九・一五～一九）によつてゐる。

や素材が盛り込まれた作品であった。その分主題の統一性は希薄にならざるをえなかったが、次作の『行人』では再び近代化の道を息せき切って進んできた日本の姿が主人公に色濃く込められるとともに、懸案の主題である朝鮮との関係が彼をめぐる人間関係に映し出されるという、『それから』『門』を引き継ぐ手法が取られ、「非我」の世界への関心を立て直した漱石の創作家としての面目が取り戻されることになるのである。

〔註〕

- (1) 日記の記載による。五月三十一日には「晴。小説『それから』を書き出す」とあり、八月一日には「『それから』を書き終る」と記されている。
- (2) 引用は琴乗東編『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識』(3、緑陰書房、一九九九)による。
- (3) 海野福寿『韓国併合』(岩波新書、一九九五)による。
- (4) 吉田松陰は松下村塾に入塾してきた伊藤について、久坂玄瑞宛書簡で「中々周旋家ニナリサフナ」(『吉田松陰全集』第六卷、岩波書店、一九三五)と評している。
- (5) 日記や「断片」にも伊藤への言及がしばしば見られるが、『それから』執筆時にも六月一七日の日記に「伊藤其他の元老は無暗に宮内省から金をとる由。十万円、五万円。なくなると寄せと云つてくる由。人を馬鹿にしてゐる」という記述がされている。この記述も伊藤に対する距離を感じさせながら、金が「なくなると寄せと云つてくる」という伊藤の振舞いは、成人しているにもかかわらず父から支給される金によって優雅な日々を送っている代助の生活と重なり、伊藤に関する情報がそこに盛り込まれている可能性もあるだろう。
- (6) 韓国併合への流れとそこで伊藤博文が演じた役割については主に森山茂徳『日韓併合』(吉川弘文館、一九九二)海野福寿『韓国併合』(前出)、同『伊藤博文と韓国併合』(青木書店、二〇〇四)、呉善花『韓国併合への道』(前出)、高大勝『伊藤博文と朝鮮』(社会評論社、二〇〇二)、伊藤之雄『伊藤博文をめぐる日韓関係 韓国統治の夢と挫折 1905-1921』(ミネルヴァ書房、二〇一一)を参照した。
- (7) 『東京パック』一九一〇年四月号。他に併合条約調印直後に出版された同誌一九一〇年九月では、日本人男性と韓国人女性が結婚し、夫が妻の爪を切つてやっている一見仲睦まじい姿が描かれた戯画が掲載されているが、そこにはその夫の配慮が妻つまり朝鮮民衆に「引搔かれぬ用意」であるという皮肉なコメントが添えられている。
- (8) 伊藤の暗殺直後にはその下手人の名前は正確に伝えられておらず、『東京朝日新聞』の報道においても一〇二八日には「兇徒の元凶はウンチアン(三十一)なり」と記され、一月一日に「兇漢安応七」という名前が出され、一月三日の記事によりやく「安重根」の名前が本名として確定されている。したがって一〇月末に想定されるこの会話において安の名前が出されていないのは自然である。ちなみに「応七」は安の胸部に七つの黒子があつたところから付けられたとされる字であり、安の名前として誤りであるわけではない。
- (9) 中野重治『漱石以来』(アカハタ)一九五八・三・五。引用は『中野重治全集』第三卷(筑摩書房、一九七八)による。
- (10) 針生一郎『明治文学における自我と民衆』(『文学』一九七六・七)。
- (11) 米田利昭『わたしの漱石』(勁草書房、一九九〇)。米田は一方向的に中国・朝鮮に対する漱石の差別的な眼差しを指摘するだけでなく、「漱石の中国人観、朝鮮人観には、人権思想はあつた。それと異民族支配に対する罪悪感とまではいえないがそれを倫理的に不快とする抵抗感覚はあつた」と述べている。
- (12) 小森陽一『漱石を読みなおす』(ちくま新書、一九九五)。小森は「二人主義」の倫理を、国家間の倫理にしたとき、そこには明らかに帝国主義批判の論点が屹立するのです」と述べている。
- (13) 伊豆利彦『漱石と天皇制』(有精堂出版、一九八九)。
- (14) 近年発掘された、『満州日日新聞』に掲載された「満韓所感」(一九〇九・一一・六、黒川創「暗殺者たち」『新潮』二〇〇八・二、で紹介)

は高木という男の存在で、彼に対する嫉妬が千代子への接近を躊躇させ、彼との競争関係に陥ることを回避させている。須永は叔父の松本に「世の中と接触する度に内にとぐるを捲き込む性質である」あるいは「自我より外に当初から何物も持つてゐない男である」(ともに「松本の話」一)と評される人物であり、自身の自我を傷つけられることを何よりも恐れている。彼は恋愛に関しても「若しその恋と同じ度合の激烈な競争を敢てしなければ思ふ人が手に入らないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐ろにして恋人を見棄ててしまふ積である」(「須永の話」二十三)という確信を抱いているが、作中人物としての輪郭をほとんど持たない高木の存在は、むしろこうした彼の自己保全の欲求を喚起する装置として機能している。

こうした須永の輪郭は、後年の作品になるが三島由紀夫の『春の雪』(一九六五〜六七)の前半部分での主人公清頭を想起させる。清頭も冷淡な自我主義者であり、自身を慕っていることを知っている聡子の接近を回避しつづけるが、それは結婚によって堂上華族の令嬢である彼女が担っている優雅の位階のなかに自分が入った時、彼女の劣位者に自分が置かれてしまうからであった。そのため清頭を断念した聡子が皇族のもとに嫁ぐことが決まった段階になって、逆に彼女への情念が清頭を捉え、聡子を犯すという行為に駆り立てられるのである。

清頭も須永と同じく自我が傷つけられることを恐れる人物だが、三島の世界に繰り返し描かれる憑依的な情念に合一することによって、動的な行動者となる。それに相当するものが漱石の世界では「暗示」

であり、外界からの働きかけに半ば無意識に感応することによって、行動の主体となることが少なくない。その典型が三千代への愛の再認識と父親に押しつけられる政略結婚の回避が相乗しつつ、彼女を平岡から奪い取る行動の主体となる『それから』の代助であった。自我意識の檻のなかにとどまる限り、人間は動的な行動者となれないというのが漱石と三島に共通する認識であり、外部的な要素と感応し、それを内に導き入れることによってはじめて行動の動力を得ることができのだった。そのため彼らはある意味では受動的な人間たちである。『金閣寺』の内省的な主人公は柏木という友人の虚無の思想に染まることを契機として放火者となり、『坊っちゃん』の一本気な主人公にしてもあまりにも周囲の使喚にたやすく乗ってしまう青年であった。

漱石の作品世界ではさらにその外的な要素はメタレベルからもたらされる。すなわち坊っちゃんや喧嘩っ早い性格の背後に日露戦争が透かし見られ、代助や宗助の女性を奪い取る行動の背後に韓国併合の進行があつたように、彼らは同時代の日本の対外的な行動を写し取るように、他者への働きかけをおこなっていく。それが取り払われた地平に置かれると、『草枕』(一九〇七)の語り手のように漱石の人物は審美的な観察者になってしまい、行動の契機を手にしにくいのである。

『彼岸過迄』はこのように、漱石の自我観や日露戦争後の社会や外交への認識が主要人物に分担的に託され、さらに千代子の姪である幼女の死には、前年の十一月に急逝した自身の五女ひな子の急逝が映し出されるといように、その時点の漱石の手の内にあつた諸々の主題

十夜」では絶壁に迫いつめられた庄太郎が、自分のもとに押し寄せて来る豚の群の鼻を叩きつづける道具として、『三四郎』(一九〇八)では川縁で寝ている二匹の羊を睨んでいる、向こう岸にいる「悪魔」^{デヴィル}が手にしているものとして語られている。いずれも相手に加えるべき攻撃の手立てとして意味づけられているが、その含意を『彼岸過迄』に振り向け、満州に赴いていった森本の輪郭を考慮すれば、それはアジア諸国に植民地化の力を及ぼそうとする日本の帝国主義的な攻撃性を示唆することになる。森本は今後いわゆる「大陸浪人」になる可能性があるが、実際日本の中国大陸での帝国主義的進出に加勢したのは、頭山満や内田良平に代表される冒険者の気質を持った「大陸浪人」たちであった。

また「蛇」は男性の性器の象徴であり、それが呑み込んでいる相手と「長い様な又短い様な、出る様な又這入る様な」関係を結んでいるのは性行為自体を暗示している。洋杖もその形態から男性器の象徴と見ることができ、したがってこの奇妙な洋杖は全体として女性への完全ではない侵犯、領略を表象していると見なされる。そして前にも触れたように、漱石の作品でも大衆ジャーナリズムにおいても、韓の併合は男女の結婚に見立てられていたのであり、そこから考えてもこの蛇の頭を持つ洋杖が併合後の日韓関係のイメージ化であることがうかがわれるのである。

先に引用したように、漱石は生命の危機を脱しつつあった時期に安部能成や坂元雪鳥に「朝鮮の合邦」について尋ねており、身体が平常

ではない状態にあつてもこの問題が脳裏にとどまっている。その意識のなかで『それから』『門』を引き継ぐ形で韓国併合の問題がこの作品に盛り込まれていると考えても不思議ではないだろう。実際併合後も朝鮮では、特権を奪われた旧両班層を中心とした人びとによる抗日運動が持続しており、日本はそれに対して憲兵警察制度による武断統治の強化によって対応しようとした。日本は民族的な近しさから朝鮮人を日本人に「同化」させようとする施策を取ろうとしたが、それによつてかえつて「同化」しきれない、すなわち〈呑み込まれ〉きらない他者としての姿が浮上してくるのである。それは次作の『行人』(一九二二〜二三)でより全体的な主題として描かれることになる。

敬太郎自身は作中で様々な人物を媒介する役柄であるために、『それから』の代助のような動的な行動の主体にはならないが、森本の輪郭を引き継ぐことによつてやはり帝国主義的な日本の寓意を間接的にまとっている。また定職を探しあぐね、森本に「へえー、近頃は大学を卒業しても、ちよつくら一寸口が見付からないもんですかねえ。余程不景気なんだね」(『風呂の後』六)と言われる姿は、『それから』でも描出されている、日露戦争後の不況下の日本の表象でもある。

しかし『彼岸過迄』の中心人物は敬太郎の知人である須永で、後半に展開される彼の独自の長い物語が作品の主要部分を成している。彼は自分との結婚の意志をほめかしている従妹の千代子と結ばれる成り行きにあつたにもかかわらず、結局彼女を妻とすることからみずから降りてしまうのである。その直接の契機として挙げられているの

六 『彼岸過迄』の「洋杖」

けれどもこれまで眺めてきた韓国・朝鮮との関係はやはりこの作品にも寓意的な形で姿を現している。初めの「風呂の後」で敬太郎が交わりを持つ下宿の同居人の森本は、事業欲に導かれて九州や四国に足を伸ばしたところのある「冒険家」的な人物で、現在は役所に勤めているものの、間もなくそこを去って満州に赴くのだが、彼が置いていった「洋杖」が媒介となつて、その後の章で敬太郎はこの洋杖を自分の持物として過ごすことになる。重要なのはこの洋杖のみならず、その持ち手の部分に森本がみずから彫つた「蛇の首」である。

此洋杖は竹の根の方を曲げて柄にした極めて単簡なものだが、たゞ蛇を彫つてある所が普通の杖と違つてゐた。尤も輸出向に能く見るやうに蛇の身をぐるぐると竹に巻き付けた毒々しいものではなく、彫つてあるのはたゞ頭丈で、其頭が口を開けて何か呑み掛ける所を握にしたものであつた。けれども其呑み掛けてゐるのが何であるかは、握りの先が丸く滑つこく削られてゐるので、蛙だか鶏卵だか誰にも見当が付かなかつた。

（「停留所」五）

つづく同じ章の「六」では「胴から下のない蛇の首が、何物かを吞まうとして吞まず、吐かうとして吐かず、何時迄も竹の棒の先に、口を開いた儘喰ひ付けてゐる」と、「呑みかけ」の状態がより詳しく語られるが、この「何物か」を吞もうとしつつ呑みきれない蛇の頭の曖昧

な状態は、その後同じ章で敬太郎が見てもらう古い師の老婆の「貴方は自分の様な又他人の様な、長い様な又短かい様な、出る様な又這入る様なものを持つて居らつしやる」（「停留所」十九）という言葉と繋がり、この洋杖に託された森本の運命を敬太郎が引き継いでいることが示唆される。敬太郎自身この古い師の老婆の言葉が森本の置いていった洋杖の彫り物を指していることに気づき、自分に帰属するようにならないような曖昧な物の主体になつてゐることを知らされるのである。

もともと「妙な洋杖を突いて、役所から帰ると能く出て行つた」（「風呂の後」九）と記され、「森本の運命と其運命を黙つて代表してゐる蛇の頭」（「停留所」六）と表現されているように、この洋杖は躊躇せず大陸に赴いて行く「冒険家」的な森本の存在を喚起する身分的な持物である。敬太郎もまた「冒険」への憧憬を少年時代から抱きながら過ごしてきた青年であり、その敬太郎が森本の身分的な持物を引き継ぐことによつて彼との連続性を生じさせることは不思議ではない。そしてこれまでの作品との文脈を下敷きにすれば、この「何物かを吞まうとして吞まず、吐かうとして吐かず」という不完全な併呑の関係のなかで「自分の様なまた他人の様な」曖昧な帰属物となつてゐる対象とは、とりもなおさず併合によつて日本の一部となりながら、それまでの抵抗の姿勢が残存するなかで、完全に日本に「呑み込まれ」きらない相手となつてゐる朝鮮の寓意であることが分るのである。

漱石の作品にしばしば現れる「洋杖」は『夢十夜』（一九〇八）の「第

これらは『思ひ出す事など』に「霊が細かい神経の末端に迄行き互つて、泥で出来た肉体の内部を、軽く清くすると共に、官能の実覚から杳かに遠からしめた状態であつた」などと語られる、吐血後の感慨から汲み取られた解釈である。けれどもこの死への接近がもたらした逆説的な至福の時間を、漱石は本領の創作行為に盛り込むことはなかつた。『薙露行』や『幻影の盾』（ともに一九〇五）といった、出発時に書かれた夢幻的な作品世界に漱石が回帰することはなく、『彼岸過迄』（一九二二）以降の作品は大患以前と同じく長篇の規模を取り、方法的にも主題的にも連続性を保って展開されていくのである。

しかし『門』の擱筆から約一年半の期間を置いて着手された『彼岸過迄』は前後の作品とは異なり、みずから冒頭の「彼岸過迄」に就て「個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれないだらうか」と述べるように、独立性の高い六つの章が束ねられる形で構成された異色の長篇として成っている。それらは敬太郎という青年を介して、彼の知人や叔父、あるいはその家族がそれぞれの物語の主体となる形で語られていくが、逆にいえば作品全体としての一貫した展開は乏しく、拡散した印象を残す作品である。

それはやはり、この作品が病床にとどまりがちであった時期に着想されたという事情を反映している。「彼岸過迄」に就てでは、本来前年の夏頃から新しい作品に取りかかるべきところが、身体の無理を憂慮する周囲の進言によって引き延ばしになっており、新しい年に

入ってしまった事情が述べられている。

歳の改まる元旦から、愈書始める緒口を開くやうに事が極つた時は、長い間抑へられたものが伸びる時の楽よりは、脊中に脊負された義務を形附る時機が来たといふ意味で先何よりも嬉しかつた。けれども長い間抛り出して置いたこの義務を、何うしたら例よりも手際よく遣て退けられるだらうかと考へると、又新しい苦痛を感じずには居られない。

ここに語られているように、『彼岸過迄』はその時点での問題意識を起点として物語を構築するというよりも、職業作家としての創作行為に復帰するための助走として書かれた性格を帯びている。本来漱石に創作のモチーフを与えるものは、「非我」としての外部世界の動向であり、新聞社の一員となつてからはとくにそれを源泉とする傾向が強まつていった。したがつて大患やその後も断続的に襲われた胃潰瘍や痔疾などの病によつて病臥に伏しがちであつたことは、その外界への感応を低下させる要因とならざるをえない。『彼岸過迄』が物語的な強い一貫性を持たないのはその現れでもあり、それを代替するように、ここではこれまで漱石が作品に盛り込んできた主題と現在時の感慨がいわば総花的に込められ、それぞれの短篇の軸をなしているのである。

石は談話「死骸となつて棄てられた博士号」（一九一一）で次のように語っている。

結局文部省は私に何しても博士号を呉れたと云、私は何うしても貰はぬと云ふ、此儘このままで幾年か経過すれば世間の人達は私が博士を辞退したのだと云ふことは忘れて仕舞ふでせうから文部省は何所迄も私を博士にして仕舞つて私を文学博士夏目金之助と呼ぶのでせう、が私は唯の夏目ながしで暮らしたいんですからさう云ふことは甚だ迷惑千万です（以下略）

漱石が博士の学位を受けることを拒んだのは、とくにその反権力的な姿勢の現れと見る必要はないと思われる。〈学者〉という自身の立場を功利主義に對置されるものとして漱石は尊重していたが、東京朝日新聞社入社によってこの立場を放棄することになった四〇歳代前半には、新たな自己の在り処を確立することに心を碎かねばならなかった。そこで得られたのは、それまでの〈学者〉でもなく、青年期に描いた反世俗的な風流人でもなく、外界の潮流の核としてのFを捉え、そこに潜む「真」を描き出す職能の主体としての「芸術家」ないし「作家」という同一性であった。それが明確化された段階になって、自分が数年前に苦勞して滅却した〈学者〉としての位置をことさらに与えられるのは、確かに「甚だ迷惑千万」なことだっただろう。まして当時の新聞紙面で付度されていたように、漱石の生命の危機を見越し

て存命のうちに博士号を授与しておこうという意向が文部省にあったとしたら①、漱石にとっては一層「迷惑」以外ではなかった。

反面自身の〈学者〉的自我に内実を与えていた、物質至上的な功利主義に對峙する姿勢自体はもちろん漱石のなかで持続しており、その点では漱石は依然として〈学者〉であった。「博士問題の成行」（一九一一）で「博士でなければ学者でない様に、世間を思はせる程博士に価値を賦与したならば、学問は少数の博士の専有物となつて、僅かな学者的貴族が、学権を掌握し尽すに至ると共に、選に洩れたる他は一般から閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の続出せん事を余は切に憂ふるものである」と述べられているように、漱石の意識では「博士」でなくとも学問に関わることはできるのであり、人間の精神的営為を探求する広義の〈学者〉としての活動を漱石は現在の「作家」という立場で展開していた。その意味においても「博士」の学位は漱石には不要だったのである。

この博士学位辞退の一件にも見られるように、大吐血による生命の危機をくぐりながら、漱石の表現者としての意識、自覚には揺るぎがなかった。従来「修善寺の大患」で経験した「三十分の死」②「思ひ出す事など」③は、江藤淳が「不思議な恍惚感」④「決定版夏目漱石」新潮社、一九七四）と表現するような、夢幻的な境地に漱石をいざなう契機となったという見方がされがちであった。桶谷秀昭も「漱石の幸福は、冷酷な自然の力によって、もつとも死に近いところにいたとき実現した」⑤「夏目漱石」河出書房新社、一九七六）と述べているが、

た。いわゆる修善寺の大患である。夫人の鏡子は松根からの電報を受けて一八日に修善寺に駆けつけ、大吐血後は子供たちや親族、また森田草平、鈴木三重吉、安部能成ら門弟たちが見舞いに参集した。

一時は生命の維持が危ぶまれる状態となったが、約十日後には病状が落ち着き、九月八日からは自身の手で日記を付け始め、俳句、漢詩をものするまでに回復するに至っている。九月十八日の日記には「始めて粥半碗を食ふ」という記載が見られ、九月二十日の日記には「病前に読みかけた六つかしい本を寐ながら読むに頭の工合は病前と差して異ならず」と、自身の創作の源泉たる知的能力が低減していないことを確認している。一〇月一日に帰京後は直ちに長与胃腸病院に入院し、病院の中で随想の『思ひ出す事』を書き継いでいった。明治四四年（一九一）の正月も病院で迎えることになり、退院したのは二月二十六日のことであった。

韓国併合が成ったのはちょうどこの大患の時期と重なっている。韓国併合条約が調印されたのは八月二二日であり、その二日後に漱石は大吐血を起し、危機的な状態に陥っているのである。これは決して偶然的の照応ではなく、漱石の胃の状態を悪化させていた要因に、韓国併合への憂慮があったことが想定される。国際間の政治的緊張が漱石の気分や体調に影響を与えることはこれまでもあり、イギリスから帰国後に神経衰弱が悪化したのも、義和団事変後満州からロシア軍が撤退せず、それが日露戦争の引き金になりつつあった状況においてであった。漱石が坂元や安部に「日韓併合の顛末」を聞いたのは、その

条約の調印がなされた直後であり、日本が隣国を領有して版図を拡げることへの違和感が、それまでも漱石の胃を苛んでいた可能性は十分考えられるのである。

森田草平の『漱石先生と私』（上下、東西出版社、一九四七〜四八）によれば、鏡子や見舞いの弟子たちは新聞を読みたがる漱石にそうさせないことに苦慮したようで、小宮豊隆の「修善寺日記」（『漱石・寅彦・三重吉』岩波書店、一九四二、所収）でも、極力文芸欄以外の紙面を漱石に持つていかないようにしたことが述べられている。それは漱石が昵懇にしていた長与病院院長の長与称吉が九月五日に病死していたことを漱石に知らせまいとするための配慮とされているが、外界の事象への過剰な関心が胃に負担を与えることも慮られたのである。また漱石自身が長与院長の消息を知るために新聞を読もうとしたのではもちろんないはずである。漱石が知りたかったのは韓国併合の成り行きであったが、それは二二日の併合条約調印後もその内容がしばらく公にされず、二九日になってようやく「韓国併合詔書」が発せられるというズレがあったためでもある。ちょうどその期間に漱石は生死の境をさまよっていたのであり、そのため意識が平常に戻るとすぐに坂元や安部にその件について話を聞かねばならなかったのである¹⁶⁾。

一方漱石自身に関わる事件としては、長与病院退院間近の明治四四年二月二〇日に文部省より博士号授与の通知を受けるものの、辞退するという出来事があったことは周知のとおりである。これについて漱

日本人は新取の氣象に富んで居て、貧乏世帯ながら分相応に何処までも發展して行くと云ふ事実と之に伴ふ経営者の気概であります」と語られている。この旅行には漱石は、東アジアでの日本の拠点を築く事業の推進役であった満鉄からの招待を受けるといふ意識で臨んでおり、その（公的）な立場からの視察報告という性格が談話や講演にも現れている⁽¹⁴⁾。『滿韓とこころぐ』にもそれが垣間見られるが、その立場を滲出させつつそれを相対化する表現が『滿韓とこころぐ』に点綴されている。胃痛への言及は私的な感覚の表明としてそれを担う要素にほかならなかった。

もともと漱石が現実には胃痛に苦しみつつ旅程をこなしていたことはいうまでもない。出発時にも、もともと中村是公とともに八月二日に日本を発つ予定だったのが、胃カタルの発作によって出発を遅らせ、九月二日の出発となったのだった。そうした体調にもかかわらず、漱石は営口と大連で講演をおこない、大陸で地歩を築きつつある同胞の営みを称揚しつつ、文学者としての立場を表明している。近年見出された、『滿洲日日新聞』の主催で九月一二日に大連でおこなわれた学術講演会「物の関係と三様の人間」では、人間を「物と物との関係を明らかにする人」「物と物との関係を変化せしむる人」「物と物との関係を味ふ人」の三種に分け、文学者を三つ目の範疇に属する人間であるとしている⁽¹⁵⁾。

これは「非我」の世界の様相を「我」を通して描くという、これまで眺めてきた漱石の創作理念にも叶った位置づけであるだろう。漱石

の分類では文学者は、科学者に相当する第一のタイプや事業家に相当する第二のタイプと違い、外界における事象を意識的に組み合わせて生じる関係性を美的に表象する人間であり、たとえば工場やドックや大煙突といった散文的な対象であっても、その（味わい方）によって十分美しい画面が構成されるという。この講演で「物と物との関係」の例として「男と女が如何なる関係にあるのか」が挙げられているように、この「関係」は具体的な事物の配置から人間同士の関係、あるいは国と国との関係にまで敷衍されていく拡がりをはらんでいる。とりわけこの時期は日本と韓国の「関係」の行方が重大な問題となっていたのであり、それが漱石の創作家としての触手を動かさないとはいえないのである。

五 大患の前後

漱石の胃痛は帰国後も快癒に向かうことはなく、翌明治四三年（一九一〇）六月には内幸町の長与胃腸病院での検査で血便が認められ、胃潰瘍の疑いが呈された。『門』の連載が終了してすぐの六月一日には同病院に入院し、苦痛を伴う「蒟蒻で腹をやぐ」（「日記」一九一〇・七・一）治療を受け、状態の好転が認められたために七月三十一日に退院している。その後転地療養のために、八月六日に弟子で俳人の松根東洋城の滞在することになっていた修善寺温泉に赴いたが、そこで胃痙攣を起こすなど状態が悪化し、一七日、一九日の吐血につづいて二四日には五百グラムの大吐血を起こして人事不省に陥っ

近感が示されている。「満目蕭々遠い山と近き岡を除いては高梁の渺々として連なるのみ」(九月一七日)といった満州の光景は、韓国に入ると「赤土と青松の小さきを見」て「なつかしき土の臭や松の秋」という句を詠んだり、「始めて稲田を見る。安東県の米は朝鮮米なり純白にて肥後米に似たり」(九月二七日)と書きつけたりするところからうかがわれるように、自国のそれを想起させるものに変わっていく。一〇月一日の記述では宿で見つけた竹に対して「満韓を旅行して始めて竹を見る」という感想を記し、一〇月一〇日には、登った山の中に「松及び谷驚くべくよき所あり」という印象につづいて「高麗百濟新羅の国を我行けば／我行く方に秋の白雲」といった、韓国の自然と自己を溶け合わせる趣きの歌三首を書きつけている。逆にいえば、こうした「韓」に対する親しみを語ることで、伊藤暗殺直後の新聞紙面においては憚られる面があり、それが『満韓』から斥けられることになつたとも考えられる。

興味深いのは、『満韓ところ々』に繰り返し見られる胃痛に関する言及が日記には姿を見せないことで、それは満鉄関係者との交遊の叙述が『満韓』と比べると僅少であることと照応をなしている。たとえば『満韓』の三十一章の冒頭には、旅順から大連に移動する際に次のような記述が見られる。

愈いよいよ腹が痛んだ。ゼムを噛んだり、宝丹を呑んだり、通じ薬を遣つたり、内地から持つて来た散薬を用ひたりする。毎日飯を食つて吞

気に出歩いてゐる様なものゝ、内心では是こゝりや堪たまらないと思ふ位であつた。

こうした身体的状態に関わる記述は本来むしろ日記の方にふさわしいはずだが、逆に新聞紙面という公的な場所に現れ、私的な出来事や感情を記載するべき日記では胃痛への言及はされていないのである。やや深読みをすれば、『満韓』で胃痛の不快感が繰り返し語られるのは、そうした状態にある作者を支えるべく、植民地経営に関わる知己や旧友との交わりが必要であるという印象をつくるためであつたと考えられなくもない。いいかえれば、この紀行文における漱石の胃痛は、植民地的空間の描出に対する〈アリバイ〉として機能しているとも見られるのである。

日本の軍事的強化に対する漱石の眼差しは、これまで見たようにアンビヴァレントな色合いが強く、西洋列強の侵略を堰き止め、一国の独立を確保する条件として肯定されると同時に、近隣アジア諸国の自律性を失わせる契機として批判的に眺められてもいる。満韓旅行においても、漱石は韓国の風物に相対的な親しみやすさを感じるとともに、この地に進出して活動の領域を拡げつつある日本人の姿に頼もしさを覚えてもいる。そもそも韓国に対して感じられる親しみ自体が、日本人の進出によって生活文化が部分的には日本のそれに近いものとなつていた結果でもあつた。

談話の「満韓の文明」(一九〇九)でも「此の度旅行して感心したのは、

として受け取るのは、やはり漱石の感覺的評価の一例だが、少なくともその機構のなかで朝鮮人の存在が肯定的に位置づけられていることは否定できない。

この『満韓ところ々』の素材となった旅行は、当時満鉄総裁であった大学予備門時代の旧友中村是公の招待を受けておこなわれた。漱石が東京を発つたのは明治四十二年（一九〇九）九月二日であり、神戸から大阪商船の鉄嶺丸に乗り込み、六日に大連に着いている。その後奉天、長春などに滞在した後九月二十七日に韓国に入り、平壤、京城、仁川などを訪れ、一〇月一三日に釜山から帰国している。紀行文に語られる内容は、その表題と合致せず「満」の部分のみであり、中村是公をはじめとする満鉄の関係者や、橋本左五郎、佐藤友熊ら大陸在住の旧友たちとの交友を主な内容としている。

この紀行文が連載されたのは、安重根による伊藤博文暗殺事件が起きる前後であり、『門』の会話にもあるような「物騒」な所として満州・韓国のイメージが高まっていた時期においてであった。そうしたイメージを受けるように、伊藤の暗殺が起きて約十日後の明治四十二年一月五日からは、『東京朝日新聞』で同僚（社会部長）の渋川玄耳の「恐ろしい朝鮮」の連載が開始され、一月三〇日まで続いている。もつともこの記事ではその表題とは裏腹に、個人としてのかなり客観的な視点から、日本や中国の支配に浸食されつつある韓国の現況が、様々な場面から報告されている。そこには当地の日本人に対する批判もしばしば差し挟まれており、たとえば商売をするにしても、長

期的な展望をもつて地道なやり方を取ろうとする「支那人」と比べて、日本人は短期間に利益をかすめ取ろうとする傾向が強いことが指摘され、あるいは米を運搬する朝鮮人の舟を、米を没収した上で乗組員とともに焼いてしまった日本人官吏の話が、「恐ろしい朝鮮より恐ろしい日本が朝鮮にはあるらしい」という感想とともに語られていたりしている。

語られる対象が満州と韓国という差があるとはいえず、現地の様相を観察する情報量においては、渋川玄耳の「恐ろしい朝鮮」の方がむしろ『満韓ところ々』に優っているともいえる。後者からは満州に生活する庶民の姿はごく断片的な形でしか伝わってこないのである。それは本来漱石の第一の関心が国家的な次元にあって、決して庶民の生活の側にはなかったことの証左でもあるとともに、伊豆利彦が「漱石が満鉄総裁の旧友として特別な賓客として旅行し、伊藤博文暗殺前後の大陸進出に湧く日本の新聞にその旅行記を発表しなければならなかった」⁽⁸⁾と述べるような事情が背後にあることが推察される。伊豆が指摘するように、この紀行文は満鉄を中心とする日本の満州進出の様相の報告書の趣きを帯びており、漱石には珍しく、一人の表現者としてよりも、自身が身を置く新聞社の〈社員〉的な立場を押し出すようにする傾向が認められるのである。

それは『満韓ところ々』の内容と同時期の日記の記述に差があることからもうかがわれる。前者には現れない「韓」の部分の記述が日記には当然見られるが、そこでは漱石が韓国の風土に対して覚える親

ていたとは思えない。しかし自国の固有性とともに他国の固有性を尊重しなければならぬという価値観が漱石のなかにあるとすれば、好悪に関わらずこの隣国の存在自体は認めなければならないのである。漱石が韓国併合を批判的に表象するのはこうした意識が根底にあるからにほかならない。

四 朝鮮への親しみ

すると『満韓とく』に散見される、中国や韓国に対する差別的ともいえる表現はどこから来ているのかという疑問が浮かぶが、それも皮肉なことと同じ地平からもたらされていると考えられる。すなわち漱石の「個人主義者」の基底をなすものが、それまでの知的営為の堆積に支えられた感覚の活動であるとすれば、その政治的、倫理的な認識とは別個に、自身の感覚の肯わないものに対して否定的な言辭を投げるのは自然な流れだからだ。先の引用にあった、中国人のクローリーの姿を、「汚らしい」あるいは「不体裁」と受け取るのは、こうした漱石の感覚的判断が発動した例にほかならないといえよう。

しかし審美的判断をおこなう感覚的主体は、当然その対象を肯定的にも捉えるのであり、中国人、朝鮮人に対しても積極的に評価する記述が織り交ぜられていることは見逃せない。大連の豆油工場で働く労働者たちの描写では、「クローリーは大人なしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、たゞ見物するのさへ心持が好い」と記され、粗食にもかかわらず長時間の重労働をこなす労働者の体力への感嘆が表明

されている。漱石は彼らのたくましい肉体を眼にして「昔韓信に股を潜らした豪傑は屹度こんな連中に違いない」という感想も覚えているのである。また遼河河口に絶え間なく泥が押し寄せてくる光景を見て、「二ヶ月で河口は悉皆塞がつて仕舞ひさう」な印象を覚えるものの、「それでも三噸位な汽船は苦もなくのそくと上つて来ると云ふんだから支那の河は無神経である。人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄栄えてゐる」と記されているのは、一見侮蔑的な表現に映りながら、「悠然」や「栄えてゐる」という言葉が使われているように、むしろ中国という国とその民衆のスケールの大きさに対する感嘆がアイロニカルに語られていると見られるのである。

またしばしば引用されるように、韓国滞在中の明治四二年（一九〇九）九月二十九日の日記には、日本人と朝鮮人を対比して後者の方に好ましい印象を覚える、次のようなくだりがある。

絶壁の下朱字を刻する所に日本の職（人）三人喧嘩をしてゐる。一人は半袖のメリヤスに腹掛屈強の男一人は三尺に肌脱の体共に大坂弁なり。何時迄たつても埒あかず。風雅なる朝鮮人冠を着けて手を引いて其下を通る。実に矛盾の極なり。（九月二十九日）

宗主国となりつつある国の人間が野卑な姿を見せ、その支配下に置かれたつつある民族が「風雅」な様相を呈しているズレを「矛盾の極」

する言葉遣いが見られたりする。満州での見聞を綴ったこの紀行文について、漱石の「中国人観、朝鮮人観、それが、ごく自然に帝国主義、植民地主義に試みていた」ことの証左とする、中野重治に代表される見方⁹⁾が受け継がれ、漱石が「日本帝国主義の先兵としての満鉄の役わりにも、抑圧と搾取のもとにある中国民衆の状況にも、鈍感で無知であった」(針生一郎)¹⁰⁾、あるいは「中国人や朝鮮人を一人一人として見るばかりで、一つながりの民衆的な主体とは見なかった」(米田利昭)¹¹⁾といった評価が提示されてきている。

しかしここで見てきたように、漱石の言説のなかには韓国・朝鮮人に対する共感的な記述も存在し、少なくともこの半島の隣国に強い関心を持っていたことは否定できない。先に見たように、ハーグ密使事件の際には、日本の姿勢が「もつと強硬」であつてもよいと記しながら、一方では朝鮮王室への「同情」を述べ、また韓国紳士日本観光団の記事についても、「諸新聞の記事」がどれも「軽侮の色」を漂わせていることに腹立たしさを覚えているのである。また韓国併合についても、漱石は明治四三年八月の大吐血による人事不省からの回復の途上でも、見舞いに来た安部能成に「先生は朝鮮の合邦、梅さんのことをきかれた」と手記(一九一〇・八・三〇)に記されるような質問をしている(夏目鏡子『漱石の思ひ出』改造社、一九二八、に収載)。また同じく修善寺で漱石の看病と世話をしていた坂元雪鳥(白仁三郎)の「修善寺日記」(創藝社『夏目漱石全集』月報、一九五四・四、に収載)にも「夜隣室に当直す。日韓併合の顛

末をお話する」(一九一〇・八・二八)という記載が見られる。危機的な状況を脱し、ようやく食べ物が口に入るようになりつつある段階でも、漱石の関心がこの問題に向かっていることが分かるのである。

こうした漱石の韓国・朝鮮への関心は、彼がロンドンでの経験を通して「個人主義者」としての自覚を明確にしたことの因果的な結果でもあつた。ここで漱石はどの人間も「universal」な存在ではなく、それぞれの国の「local」な文化的堆積を文脈として持つ個的な存在でしかなく、その点で日本人もイギリス人も対等の立場に立ちうるという結論に達したのだったが、それはおのずと自己と他者が等しく尊重されるべきであるという考え方に敷衍されることになる。それが明瞭に示されているのが、大正三年(一九一四)におこなわれた講演「私の個人主義」で、ここではロンドンでの苦悩と迷いの末に「自己本位」の立場が見出された経緯につづいて、この立場に立脚する個性の發揮について「自己の個性の發展を仕遂げやうと思ふならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬ」と明言されている。そしてこの他者の尊重は個人の次元にとどまるものではなく、国と個人を入れ子的に捉える明治人的な感覚のなかで、どの国もそれぞれの固有性のなかで進んでいく権利を持つているという認識に連続することになる。小森陽一がこの一節に帝国主義批判を見ている¹²⁾ように、(日本が発展しようと思うならば、他国の個性も尊重しなければならない)という命題がそこから容易に導き出されるのである。

ありていにいって、漱石が韓国・朝鮮にさほど積極的な愛着を持つ

の起点を表しており、そこで語られる出来事が因果的にもたらすであろう状況の様相が、作品内の世界を形成しているといえるだろう。それは併合後の日本の推移を漱石が見通した姿にほかならず、それが決して豊かなものとして描かれていないところに、漱石の韓国併合に対する批判的な意識がうかがえるのである。

主人公宗助は臆首に怯えつつ日々を送る下級の官吏であり、愉しみといつては日曜の昼寝と散歩くらいしかなく、また子供にも恵まれないために、未来の繁栄を子供に託すということも禁じられている。宗助の妻の御米はこれまで三度妊娠しながらいずれも流産や死産に終わっているのである。それはすなわち帝国主義的な拡張を遂げた日本が、それによって豊かな未来を手にするわけではないという見通しの表現にほかならない。明治三十九年(一九〇六)の「断片」には「吾ニ未来ナシト云フ者ハ吾ハ子ヲ生ム能力ナシト云フニ等シ」とはつきりと記されている。すなわち「子ヲ生ム能力」を欠如させた宗助、御米夫婦に仮託された近代日本は「未来ナシ」という宿命にあることが宣言されているのである。

この宣言は実際作中でなされており、御米が子供に恵まれない理由を易者に見てもらおうと、「貴方は人に済まない事をした覚えがある。その罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない」と断言されるのだった。この「人に済まない事をした覚え」とは、韓国人研究者の金正勲(キョンソン)が『済まない事』をされた対象は、安井であると同時に(満州(朝鮮)にもなる)『漱石と朝鮮』(中央大学出版部、二〇一〇)と述べ

るように、まさに断行されようとしている韓国の併合を(未来)の地点から過去化した表現以外ではないだろう。「二人の抱く罪悪感はありませんに大袈裟で悲観主義的すぎる、と決めつけてしまうことはたやすい。実際彼らのしたことはそんなに大それたものではないように思えるから」(キヤサリン・ロング 『門』第十七章 『比較文学研究』 33号、一九七八)といった指摘もされているように、作品内の文脈からすれば宗助が御米を安井から奪ったことを指すこの行為が、彼らに強い罪障感とともに日々を送らせ、またその行為の因果のように子供に恵まれないという状況を与えるほど深刻なものであるかどうかは疑わしい。その結果に「悲観主義的」な色合いを与えているのは、とりもなおさず主人公夫婦に託された日本の現況と先行きに対する作者漱石の批判的認識にほかならないのである。

もつとも漱石の意識的な姿勢としては、従来東アジア諸国に対しては軽侮の眼差しを向けていたという評価が一般的であり、ここで眺めてきたような韓国・朝鮮との関係の取り込みはそうした傾向に逆行するものとして映るかもしれない。漱石の東アジアすなわち中国や韓国・朝鮮への侮蔑的な意識を傍証する中心的な言説として扱われてきたものが、明治四二年(一九〇九)に発表された『滿韓ところ々』である。ここでは大連に着いた際に受け取った印象として「河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれども大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊ると更に不体裁である」といった記述がされていたり、中国人を「チャン」と呼んだり

(8)

実の状況にやや先んじていたが、『それから』の経緯を引き継ぐ『門』では、主人公の宗助は友人の安井からその共棲者であった御米を奪い取って夫婦となっており、〈併合後〉の状況を先取りした内容となっている。しかしもちろんそれは日本人の誰にも見通せる展開以上のもではない。併合時には「内縁関係」にあった日本と韓国という〈男女〉が、役所の「国籍係」に婚姻を届け出るといふ戯画が描かれているように、この時期においてはすでに韓国は日本の版図に組み込まれた空間として見られていた⁽⁷⁾。

したがって日韓併合の表象でもある宗助と御米の結婚後三年に想定されている『門』の時間は、大正二年（一九一三）に相当する〈未来〉をはらんでいると見なすことができる。もともと作中にも現実的な時間は挿話的に盛り込まれており、それはもちろん近未来ではなく、執筆時に近い時間である。しかしそれが先にも触れたように、ほかでもなく伊藤博文の暗殺事件であることは暗示的である。前半の「三」章でこの事件が話題になり、御米が「どうして、まあ殺されたんでせう」と宗助の弟の小六に尋ねたのにつづいて、以下のような会話が交わされる。

「短銃ピストルをボン／＼連発したのが命中したんです」と小六は正直に答へた。

「だけどさ。何うして、まあ殺されたんでせう」

小六は要領を得ない様な顔をしてゐる。宗助は落付いた調子で、

「矢つ張り運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨さうに飲んだ。御米はこれでも納得が出来なかつたと見えて、

「どうして又満洲杯なぐさへ行つたんでせう」と聞いた。

「本當にな」と宗助は腹が張つて充分物足りた様子であつた。(二三)

そしてそれにつづくやり取りで、宗助は先に引用した「伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ」といふ言葉を口にするのだった。見逃せないのは、この場面の会話が決して執筆時の〈現在〉に属するものではないことだ。伊藤が安重根によつて暗殺されたのは明治四二年（一九〇七）一〇月二六日であり、この場面はその数日後に設定されている⁽⁸⁾。したがつてこの事件は発表時の四ヶ月以上の出来事になり、むしろ近い〈過去〉に属するというべきである。漱石は執筆時に並行して生起した出来事を作中に取り込むことに長けており、『吾輩は猫である』では旅順の陥落や日本海海戦が、前作の『それから』では製糖会社と政治家の間の贈収賄事件である日糖事件が、同時進行的な話題とされていた。それと比べると、『門』での伊藤博文暗殺事件はやや時間が経過した話題であり、新聞読者の興味を掻き立てる同時性を持っていない。この〈過去〉の出来事が話題にされているのは、それが作品の主題と関わるからであり、韓国併合の問題がこの作品に底流することが示唆されているのである。

そのように考えれば、この場面が指示する明治四二年一〇月末という時間は〈現在〉を意味するといふよりも、主人公たちが生きる時空

『それから』後半の「十四」章で、父から押しつけられている縁談を断ることを決意した代助が「今迄は父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔らかに自我を通して来た。今度は愈本性を露はさなければ、それを通し切れなくなつた」と自身に咄くの響き合うように、周囲の他者を慮りつつ「柔らかに自我を通」すという姿勢から、相手を押しつけて目指すものを領有するという「本性を露は」すに至るのは、伊藤が統監を辞して以降の韓国への向かい方そのものであった。

伊藤を継いだ曾禰荒助統監は韓国内の合邦推進勢力である一進会を支持せず、李完用内閣を押し立てようとする、伊藤の路線を引き継ぐ統治の方向性を示した。しかし強引に併合を断行しようとする元老の山県有朋や陸相の寺内正毅は曾禰のやり方に批判的で、伊藤が明治四二年（一九〇九）一月にハルビンで安重根に暗殺されて以降は、曾禰の健康状態が悪化したのを理由に曾禰を韓国統治から斥ける姿勢を露わにするようになった。知られるように伊藤の死を契機として韓国併合に向かう流れは加速することになるのである。李容九が率いる一進会の合邦運動は、それを山県や寺内が承認する意向であることが、会の顧問を務める政治運動家の内田良平や杉山茂丸らを介して伝えられることによって活発化し、併合への傾斜が韓国内部からも強められた。李は韓国がすでに政治的独立を保ちえないことを認識しており、韓国人の意向が少しでもすくい上げられる道として、日本との「合邦」を選ぼうとしたのだった。李が明治四二年一二月に発表した「声明書」

では、悲痛な境涯にある韓国が息を吹き返すには「政合邦」によって日本と「両翼同飛、両輪共転」の関係を作り上げることが必至であるとされ、李完用首相と曾禰統監に宛てられた合邦請願書では、「合邦を組成し、日韓一家」を形成することが強く願われていた。しかし実現されたのは韓国が日本と対等の立場で「合邦」することではなく、韓国が完全にその主体性を失い、日本に呑み込まれる「併合」という形であった⁶⁾。

三 〈未来〉からの批判

『それから』につづく『門』が東京と大阪の『朝日新聞』に発表されたのは明治四三年（一九一〇）三月から六月にかけてで、伊藤博文はすでに世を去り、まさに韓国併合が断行されようとしている時期であった。この年の五月に曾禰統監は更迭に追い込まれ、寺内正毅が陸相のまま韓国統監を兼任するようになるのにつづいて、六月の閣議では桂太郎内閣は「韓国に対する施政方針」を打ち出して、併合への動きが本格化した。そして八月二日には併合に関する日韓条約が調印され、韓国は呼称を「朝鮮」と改められ、完全に日本の一部に組み込まれることになったのである。

漱石が『門』の執筆に着手した段階では、韓国が早晚日本と一体化される運命にあることは動かし難い状況であった。『それから』で代助が平岡から三千代を奪い取る寸前にまで行ったことは、やはり当時の日韓関係の動きを映し取りつつ、併合への流れが明確化し始めた現

う嫂の名前は、伊藤が妻にした花柳界上りの女性と同じ「梅子」であった。

こうした重なりは、主人公を近代日本の暗喩ないし寓意として形象しがちな漱石にとつては自然なものである。伊藤博文に漱石が愛着を覚えていたとはいい難く、作品や日記で言及される際はつねに揶揄や皮肉を伴っている。にもかかわらずその言及の多さは見逃すことができず、善きにせよ悪しきにせよ、この初代の総理大臣とやはり初代の韓国統監府統監を務めた政治家を、近代日本の象徴的人物として漱石が眺めていたことが察せられる。『吾輩は猫である』（一九〇五〇六）では戸棚の袋戸の内側に貼られた紙に「逆か立ち」をした凶像として伊藤が語られ、肩書きが「大蔵卿」と記されているのに対して「いくら逆か立ちしても大蔵卿である」（十）と揶揄的な叙述がなされている。『それから』の次作である『門』の執筆時には、すでに伊藤は韓国人抗日運動家の安重根アンジュンゲンに暗殺されていたが、その話題が前半に現れ、そこでは主人公宗助が「伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。たゞ死んで御覧、かうは行かないよ」（三）と、伊藤の死に皮肉な評価を与えるのだった⁽⁵⁾。

そこから遡及して考えれば、三年前に代助が三千代を平岡に譲った一件が、その時点での伊藤の韓国併合に対する否定的な姿勢と照合するだけでなく、それ以前に代助が三千代の兄を介して彼女と交わりを持っていた当時の接し方も、伊藤の韓国への理念的な姿勢を想起させる。三千代の兄は「趣味に関する妹の教育」を代助に委ね、三千代は

「喜んで彼の指導を受けた」（十四）のだったが、伊藤も韓国が日本の後を追うことよって自主独立の文明国になるべく「指導」することに熱を入れていた。明治四〇年七月に締結された、伊藤の理念を反映した第三次日韓協約の第一条にも「韓国政府ハ施政改善ニ関シ統監ノ指導ヲ受クルコト」（傍点引用者）と明記されているのである。

もちろん韓国は三千代のように日本の「指導」を「喜んで」受け入れたわけではなく、先に見たように韓国の自主的な追隨を期待する伊藤の姿勢はむしろ韓国人の侮りを呼び、日本の統治に抵抗する義兵の叛乱が頻発していた。しかしその義兵闘争にしても、膨大な回数で発生し、韓国側の死者が延べ二万人近くにのぼったにもかかわらず、日本側の死者はわずかに一三〇人ほどを数えるにとどまった。呉善花オソンファは「勢力の結集力に大きな問題があった」（『日韓併合への道』文春新書、二〇〇〇）と述べているが、その頻度が伊藤を悩ませたのと裏腹に、義兵が戦闘集団として日本を脅かすには至らなかった。

その微力さもあって、日本は韓国人の自主的な追隨に期待する伊藤博文的な理想主義を捨て、力よって隣国を自分のものとしようとする姿勢を露わにするようになる。『それから』は自然主義が勃興する日露戦後の時代の空気を取り込みつつ構築されているが、奇しくも日本の韓国統治の姿勢はその入れ子をなすように、理想や理念を押し出す「浪漫主義」から現実重視の「自然主義」へと方向転換を遂げていくのである。

国は今や殆ど一にして門戸開放の必要もなく」(『東京朝日新聞』)など、いずれも両国が一体化する方向にあることが明示されている。ちなみに「諸新聞」の記事に「輕侮の色あり」というのは、觀光団の韓国人たちが日本の施設を物珍しげに眺め、製紙工場では「襪襦が紙になるに驚く」(『万朝報』一九〇九・四・二五)ような反応を示したりする姿の記述を指している。それが明治初期に西洋諸国を訪れた日本人の反応を想起させるだけに、文明化の達成によって自分たちを韓国人の上に置こうとする筆致が漱石には腹立たしいものと思われたのである。

いずれにしても韓国併合に向かおうとする伊藤と日本政府の意向は、こうした新聞報道を通して日本人一般に明確に見て取られるものであった。『それから』が書かれたのは、この韓国を「保護国」として統治するところから、併合して日本とともに「一家」を成すところへと転換しつつある時期においてであり、それを映すように主人公代助の三千代に対する態度の変化は、この対韓国の政治的姿勢の変化とびつたり符合している。

再会の三年前に代助が結婚の可能性もあった三千代を友人の平岡に譲ったのは、「今日に至つて振り返つてみても、自分の所作は、過去を照らす鮮やかな名譽であつた」(八)と記されるように、彼の内にうごめいていたある種の浪漫的な気分に通かれての行為であつた。その背後に想定されるのは日露戦争の勝利による昂揚感の残存であつたが、明治三十九年(一九〇六)の春に当たるちょうどその時期に伊藤博

文は韓国統監となり、韓国を日本の「保護国」として、日本を模した自主独立の国へ導くという自身の理想に従つた統治を開始しようとしていた。そしてその三年後の明治四二年に、代助は三千代が不在である状態を、自身の生命を衰弱させる(不自然)なものと判断し、そこから脱するべく、自身の内的な生命の要請に耳を傾ける形で、彼女を平岡から奪い取る行為に踏み出す。一方伊藤は同じ時期に韓国統治の理想・理念の成就を断念して統監を辞し、韓国の現実に向き合いつつ併合によって「一家」を成す決断をすることになる。代助にしても、三千代を平岡から奪い取ることによって彼から絶交され、実家からも勘当を言い渡され、否応なく三千代とともに「一家」を成さざるをえなくなるのである。

こうした重なりは決して偶然のものではなく、『それから』において漱石は多分に伊藤博文を下敷きにしつつ、主人公の代助を造型した節が認められる。たとえば三年前に三千代を平岡に譲ったことに「周旋」という言葉が充てられているが、伊藤は若年の頃から人間関係のなかで巧みに立ち回る「周旋」の術に長けた人物であり、師の吉田松陰に「周旋家」というあだ名を付けられている¹⁴⁾。また代助が三十歳になるうとしてまだ結婚していない理由の一つとして、「比較的金銭に不自由がないので、或る種類の女を大分多く知つてゐる」(七)ことが挙げられているが、他の漱石の主人公には見られないこうした側面は、やはり花柳界の女性との昵懇が喧伝されることが多かった伊藤の輪郭と重なるのである。しかも代助が「好いてゐる」(三三)とい

を左右する可能性のある韓国という外交の要所を治める伊藤のやり方が、「我々より見れば余りに遠慮に過ぎたりと思ふゝ点少からず」という評価が下されている。

伊藤博文の韓国統治に対する基本的な理念は、西洋諸国を範として近代化を実現した日本に韓国を倣わせることであり、西洋文明と同調しつつ自主独立の道を歩むべく「指導」することに力点が置かれた。この理念はあくまでも韓国人がそれを主体的に理解し、日本人に協力することが前提とされていたが、現実には伊藤が統監に着任した明治三十九年（一九〇六）三月以来、韓国人がそうした姿勢を積極的に示すことはなく、抗日感情はむしろ高まっていった。端的に伊藤が統監を務める期間に義兵による抗日闘争が頻発し、ピークとなった明治四十一年（一九〇八）には一五〇〇回近い衝突が発生し、義兵の死者も一万人を超えた^③。こうした流れのなかでハーク密使事件も起こっているが、意に反する状況の継起に伊藤は当初の韓国統治の理念を断念し、統監の職を辞するという選択に至ったのだった。

二 「保護」から「併合」へ

伊藤博文が持論の保護国政策から韓国を併合する方向に転じたのは辞職直前の明治四十二年（一九〇九）四月頃であった。韓国併合を断行する閣議決定のための足固めをしていた桂太郎首相と小村寿太郎外相が、併合反対派と認識していた伊藤に直談判を試みたところ、意外にも伊藤はそれを承諾し、七月六日の閣議決定に至る運びとなったので

ある。

この時期に生まれた伊藤の併合断行への翻意は事後の研究によって知られるところになったのではなく、同年四月下旬に東京上野の精養軒で開かれた韓国紳士日本観光団の歓迎会での演説でも、伊藤は日本と韓国が「一家」を成そうとしていると語って併合の方向を示唆し、聴衆を驚かせた。漱石の日記（一九〇九・四・二六）にはこの観光団に関する次のような記述があり、伊藤の演説への言及はないものの、その内容は当然了解していた。

韓国観光団百余名来る。諸新聞の記事皆軽侮の色あり。自分等が外国人に軽侮せらるゝ事は棚へ上げると見えたり。

（中略）

もし西洋外国人の観光団百余名に対して同一の筆致を舞はし得る新聞記者あらば感心也。

漱石が記しているように、この観光団は韓国の元老や前大臣、学者などによって成る総勢百名を超える団体であり、統監府の機関紙であった『京城日報』の主催で招かれ、製紙工場や農業試験場、工芸博覧会など東京各所の施設を見学している。伊藤の演説の要約や紹介は翌二四日の「諸新聞」で多少差があるものの、日本と韓国の関係については「同一目的に進み更に進んで一家とならんとするの境遇に在り」（『万朝報』）「今後恰も一家族の如くならざる可らず」（『読売新聞』）、「両

と連続していくことになるが、こうした非公式の密使による訴えは国際社会の支持を得るには至らなかった。高宗はこの事件を理由として同年七月に退位を余儀なくされ、また同月に韓国軍隊を解散させ、司法・行政を日本人が実質掌握するなど、韓国の自治権を全面的に無化する内容を持つ第三次日韓協約が調印され、韓国は事実上日本の支配下に置かれることになった。

漱石は高宗の退位について小宮豊隆宛書簡（一九〇七・七・一九付）に次のように記している。

朝鮮の玉〔王〕様が讓位になった。日本から云へばこんな目出度事はない。もつと強硬にやつてもいゝ所である。然し朝鮮の王様は非常に気の毒なものだ。世の中に朝鮮の王様に同情してゐるのは僕ばかりだらう。あれで朝鮮が滅亡する端緒を開いては祖先に申訳がない。実に気の毒だ。

高宗の退位を「実に気の毒」と同情しつつも、一方で「こんな目出度事はない」と喜ぶ記述は、漱石の韓国・朝鮮に対するアンビヴァレントな感情を示すとともに、後者については漱石のアジアへの蔑視的な眼差しを傍証するものとして受け取られがちである。しかし韓国に「もつと強硬に」対処すべきであるというのが、「今回の事件に付韓国と合併すべしとの論あるも」という、引用した伊藤博文の言葉にも見られるように、当時の世論の大勢でもあったことは念頭に置かねばな

らないだろう。引用の箇所前で伊藤は「外交権を日本に譲渡しながら、猶且陰謀を企て海牙〔ハーグ〕の如き失態を演じるとは何事ぞや」という憤りを高宗に述べ立てたことを語っているが、日本側からすれば、ハーグ密使は締結された協約の内容そのものに対する逆行であったために、面従腹背的な振舞いとして映るものでもあった。漱石の口振りにそうした憤懣が滲出している。

とくに伊藤にとつては密使の派遣は予想された事態であり、それが生起しないように高宗に釘を差していたにもかかわらず起こってしまったために、憤りは抑え難いものがあった。しかし伊藤は密使事件への憤懣から併合を言い募る世論を制するように「合併の必要なし」と明言し、持論の保護国政策を持続しようとした。それに対する世論の評価は決して高くはなく、二年後の明治四二年（一九〇九）六月に統監を辞する際にはそれを惜しむ声はほとんど上がらなかった。

それは伊藤の韓国に対する施策が微温的で、韓国人を慮りすぎたために日本人の利益を損ねているという見方が一般的であったためである。たとえば「惜しまれざる伊藤統監の辞任」〔『朝鮮』一九〇九・七〕^②と題された時事論評では、伊藤は「一に韓国其れ自身の発展に寢食を忘れ、韓人其れ自身の幸福を凶り感情を傷つけざることに汲々し、所謂韓国本位韓人本位を以て統監政治の本義とせり」と括られている。また山路愛山による「伊藤公と韓国経営」〔『太陽』一九〇九・七〕^③という長い論評でも、「大日本帝国臣民の一人として少しく伊藤公の事業を批判して見たく思ふなり」という感慨から始まって、日本の命運

容していくのに応じて、新たなFが作品の主題としての位置を占めることになる。

そして日露戦争の終結後、日本の外交の主要な問題となるとともに漱石の作品世界で中心的なFとして機能することになるのが、明治四三年（一九一〇）八月に遂行されるに至る韓国併合であった。日露戦争後「保護国」化という方向で朝鮮半島への支配を強化していった流れが、併合に向かって加速していくのは、「保護国」派の立場にあった伊藤博文が朝鮮総督府統監を辞任する明治四二年（一九〇八）中頃からであったが、『それから』『門』（一九一〇）『彼岸過迄』（一九一一）『行人』（一九一二〜一三）といった、その間ないし併合後の状況が進行していく時期にもたらされた作品群には、その折々における日本と韓国（朝鮮）との関係が織り込まれていることが見て取られるのである。

なかでも『それから』『門』に共通する、主人公の青年が友人の妻や共棲者を奪い取って自分のものにする展開ないし前史は、まさにその時期に進行していった日本と韓国との出来事と照応している。もともと「非我」の世界をFによって焦点化し、「我」すなわち自身の観点によってそれを括り取るという漱石の創作の理念に照らせば、同時代の重要な外交問題である韓国併合がその触手を動かさないとすることは考え難い。加えて漱石はイギリス留学以来、国際社会における日本の位置づけに強く意識を喚起され、それを繰り返す作品のモチーフとしてきたのであり、韓国併合がなされる同時期の作品においても

それがおこなわれていると想定するのは不自然ではないはずである。

ここで作品の執筆時期と韓国併合の進行の状況を照らし合わせれば、『それから』が起稿されたのは明治四二年（一九〇九）五月三日であり、脱稿したのは同年八月一四日である¹⁾。そしてこの時期が日本の韓国に対する政策の転換点に当たっていることは見逃せない。当時の統監府統監の伊藤博文はそれまで一貫して韓国の併合には否定的な姿勢を示し、明治四〇年（一九〇七）六月に起きた、オランダ、ハーグで開催されていた第二回万国平和会議に韓国皇帝高宗^{ゴジョン}が密使を送り、第二次日韓協約（日韓保護条約）の無効を訴えるいわゆるハーグ密使事件が起きた後も、世論に抗する形で「今回の事件に付韓国と合併すべしとの論あるも合併の必要なし、合併は却て厄介を増すばかり何の効なし」（『東京朝日新聞』一九〇七・八・一）と明言し、韓国を「保護国」の位置にとどめておくことを主張した。

ハーグ密使事件の前提となった第二次日韓協約は、明治三七年（一九〇四）八月に調印された第一次日韓協約につづいて、明治三八年（一九〇五）十一月に成ったものである。第一次協約が、韓国政府が外国との条約締結をおこなう場合も日本政府代表者との協議を経るものとするなど、韓国の外交の主体性を相対化する内容をもっていたのに対し、第二次協約ではさらに進んで韓国は日本の仲介なしに他国と条約を結ぶことができないことが明記され、韓国の主体的な外交権を剥奪する内容であった。協約の締結後高宗はこれを無効であることを訴える文書をイギリスやフランスに送り、明治四〇年の密使事件へ

露呈される「本性」

——漱石の朝鮮認識と修善寺の大患

柴田勝二

《目次》

- 一 背景としての日韓関係
- 二 「保護」から「併合」へ
- 三 〈未来〉からの批判
- 四 朝鮮への親しみ
- 五 大患の前後
- 六 『彼岸過迄』の「洋杖」^{スツツキ}

一 背景としての日韓関係

『それから』（一九〇九）におけるの代助の行動の基底にうごめいていたのは、作中にも示されるように経済的な疲弊を強め、ロシアに勝つて自国の独立を確保するという〈理想〉も見失われた日露戦争後の状

況のなかで、自身に「自然」として内在する感覚に従って生きようとする志向であった。文学的な潮流とも符合するこの「自然主義」的な傾斜に促されるように、代助は三年ぶりに再会した三千代との関係を復活させ、彼女を友人の平岡から奪い取るという行動に踏み出すのだったが、その背後に想定されるものは浪漫的な〈理想〉ではなく内在的な生命感を導き手とする「自然主義」に加えて、漱石がこれまでもつねに作品構築の際に念頭に置いてきた日本と外国の関係である。

これまでも『吾輩は猫である』（一九〇五〜〇六）に話題として盛り込まれ、『坊っちゃん』（一九〇六）の構図に写し出されている日露戦争や、『三四郎』（一九〇八）に透かし見られた維新以来の対西洋の関係など、漱石の作品には未成熟な近代国家としての日本が西洋列強とのせめぎ合いに晒される様相が、主人公の行動や彼をめぐる人物同士の間わりに託される形で表象されてきた。それらはいずれも漱石が描き出そうとする「非我」の世界のF（観念的焦点ないし集合的関心）であり、『文学論』（一九〇七）で詳述されるようにそれが時間的に変